夕刊文化

文学周遊

夕暮れ時、一茶も詠んだ江戸川の土手に秋の気配が漂う＝井上昭義撮影

小林一茶「文化句帖」　千葉県流山市

千葉県流山市の西を流れる江戸川の周りの地域は、かつていくども洪水の被害に遭ってきた。戦後で有名なのは1947年にマリアナ沖で発生し、日本を通過したカスリーン台風で、床上浸水などの被害がでた。さらにさかのぼれば、水害の脅威はもっと大きかっただろう。

徳川時代の俳人、小林一茶は江戸川を題材にした句をいくつも詠んでいる。「夕月や」は川の水かさが増し、人々が動揺している様子を見た後にしたためた。「刀禰川は寝ても見ゆるぞ夏木立」もこの川を詠んだものとされる。実際に寝転んだ状態で川が見えていたのかはわからないが、川に極めて近い場所にいたことは確かだろう。

この2つの俳句は、一茶が40代前半から後半までに書いた句日記「文化句帖」に収められている。その中で何度も出てくるのが「流山ニ入」という言葉だ。一茶にとってここは、頻繁に訪ねるべき大切な場所だった。この地に彼の支援者がいたからだ。

江戸川のすぐそばに居を構えていたその人は、5代目秋元三左衛門。「双樹」の俳号で俳句をたしなみ、2人で連句もつくった。秋元家は川向こうの埼玉県から流山に移り住み、4代目のときに酒造を始めた。そして5代目の双樹がみりんの醸造を開始し、水運を使って大消費地の江戸に運んで財をなした。

一茶の流山訪問は、50回を超えた。年上の双樹と親しく交流し、行く度に宿を借りていた。醸造に励む社氏をうたった句も文化句帖で見ることができる。寝転んでいても川が見えるとした場所は、双樹の家だったのではないかという見方もある。

ときは流れて現在。「新座敷」と呼ばれた秋元家の建物はいったん解体したうえで復元され、流山市が管理する形で「一茶双樹記念館」として一般に公開されている。庭には「夕月や」の句を刻んだ石碑が立っている。

2人の交流に端を発する俳句の文化はいまも流山に息づいている。記念館にある「一茶庵」という名の茶室で、流山俳句協会の北川昭久会長に話を聞いた。「子どもたちに俳句を広めたいと思って続けている」。2022年でちょうど20回目を迎えた少年少女俳句大会のことだ。

主催は協会など。21年は市内の小中学生から、約1万1500句が集まった。いま選考中の大会はもっと多くの応募があった。北川さんによると「内容は素直そのもの。とくに小学1～3年生はストレートに詠むので、すごい句が出てくる」。その中の誰かが、俳句の魅力をさらに未来へとつないでいく。

（編集委員　吉田忠則）

夕月や流残りのきりぎりす

こばやし・いっさ（1763～1827）　信州柏原村（長野県信濃町）の農家、小林弥五兵衛の長男として生まれる。3歳で実母と死別し、継母との関係がうまくいかず、江戸に出て奉公。俳句に親しみ、葛飾派の二六庵竹阿の門人となった。四国や九州を行脚し、有力な俳人と交流して修業。父の死後は異母弟と遺産を争い、解決後に51歳で郷里に定住した。

作品集は「父の終焉日記」「七番日記」「おらが春」など。生涯に約2万句を詠んだ。文化元年（1804年）から書き始めた「文化句帖」は個性が高まり、「一茶調」と呼ばれるスタイルが形成された時期のものと位置づけられている。（作品の引用は岩波文庫「一茶俳句集」、肖像画は一茶記念館提供）